

研究成果等の情報

県の試験研究機関で開発した最新の技術情報を紹介します。

着色良好で栽培しやすく食味のよいリンゴ早生品種「おぜの紅」^{くれない}

研究のねらい

近年のリンゴ生産現場では、果皮の着色不良や果肉の軟化傾向が見られ、地球温暖化が原因のひとつと考えられています。特に本県では「つがる」を中心とする早生品種で、良品生産が難しくなってきました。

そこで、夏期の高温条件下でも着色に優れ、食味の良好な早生の新品種を育成することにしました。

技術の特徴

1 育成経過

農林水産省果樹試験場盛岡支場（現独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所・リンゴ研究拠点）が育成した「盛岡47号」の自然交雑種子を平成2年度に播種しました。

その後この実生を養成し、選抜を重ねて有望個体を選抜し、平成19年度に果樹研究所との共同研究の成果として、「おぜの紅」^{くれない}と名称を付け、品種登録出願をしました。

2 品種の特性

- (1) 樹勢は強く、直立型の樹姿です。
- (2) 短果枝の着生が良好で豊産性です（写真1）。



写真1 「おぜの紅」^{くれない}の着果状況

- (3) 8月下旬～9月上旬に成熟する早生品種で収穫前落果はなく玉揃いは良好です。また、尻サビなどの果面障害の発生が少なく、裂果もほとんどありません。
- (4) 果実重は約300～400gで、果皮の着色性に優れ、外観は良好です。
- (5) 果肉はやや粗く、やや軟で、果汁は中～多、香りが良好で、食味は甘みと酸みがうまく調和しています。
- (6) 日持ちは室温下で約10日と考えられ、「つがる」に比較して、着色、外観や日持ち性に優れています（写真2）。

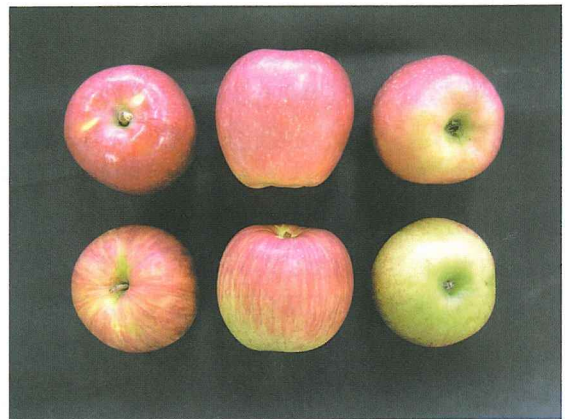


写真2 「おぜの紅」^{くれない}(上段)と「つがる」(下段)の果実

今後の取り組み

県オリジナルの早生品種として県内での普及を図るため、平成20年12月に県内のリンゴ生産者に苗木を配布しました。配布本数から換算して、本品種の植え付け面積は4haになると推定されます。現在の早生品種を本品種に更新して、観光りんご園の開園期間拡大を図ります。（執筆者：堀込 充）